降誕節第４主日　説教 「知り得ないものを信じる」要旨

牧師　黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会　2024 年 1 月 21 日

マタイによる福音書　22:1-14

おはようございます。降誕節第４主日の冷たい朝を迎えておりますが、能登半島の被災者の皆さんがどのようなお気持ちでこの朝を迎え、またこの時を過ごされていることかと思います。そのお気持ちは察するにあまりあるものがありますが、けれども、そうした中で私たちは守られ、礼拝を共にすることが許されております。しかし、この日、私たちは私たちだけで礼拝を献げているわけではありません。中部教区のホームページによりますと、七尾でも輪島でも、主にある兄弟姉妹が共に集まり、共に礼拝が献げられているとのことでありますが、このことはつまり、礼拝の場は異にしつつも、主にある兄弟姉妹である私たちは、主にあっては共に主の日に集められ、共々に同じ主を礼拝しているということです。従って、その違いは心に留めつつも、今、私たちの覚えるべきことは、主にある私たちは一つであるということです。ですから、主にあって、というここから、能登半島の被災された方々の平安を祈り求め、主にある現実をこれからも共にして参りたいと思うのです。そして、そのためにも、この主にあって、という、このところから、こうして私たちに与えられているこの日の御言葉に聞いてゆきたいと思うのです。

そこで、早速、御言葉に聞いて参りますが、ところで、御言葉が私たちに語りかけること、また、御言葉を通し神様が私たちに求められること、これらのことが私たちにとって大切なのはどうしてなのでしょうか。それは、私たちそれぞれの向かうその先には、天の御国の扉が大きく開かれ、そこから射し出でる光の中を私たちが歩んでいるからです。従って、私たちの信仰の目的はただ一つです。それは、光の射し出でる天の御国に入ることです。そして、この目的を私たちが果たすために、神様とイエス様は労苦を惜しまず働きかけてくださっているのです。それゆえ、このこと抜きに私たちが信仰についていくら熱く語ったところで、それは、画竜点睛を欠くことにもなるのでしょう。なぜなら、天の御国に招き入れられるという、福音の語る真実を欠いて、私たちがどんなに言葉を尽くし何かを語ったとしても、また、心を尽くして何かをしたところで、その信仰は命を欠いているがゆえに生き生きとしたものとはならないからです。そして、この天の御国について語られているのがこの日の御言葉でありますが、ただ、それについては、すでに先週も聞いたことでもありました。

そこで、先週、その結論として申し上げたことは、私たちと神様との関わりがイエス様ゆえに近いということでしたが、それは、この近さから示されているものが天の御国であるからです。ただ、それが時に分からなくなることがある、それゆえ、御言葉が何を語りたいかも分からなくなる、私たちにはそういうことが現にあるわけです。そこで、この日の御言葉に聞いていくに当たり、神様と私たちの関係性の近さというものを改めて確認したいと思ったのですが、この近さというものを皆さんは普段からどのように受け止めておられるのでしょうか。神様と私たちとの近さを決定的な形で明らかにしてくれているのはイエス様の十字架と復活の出来事でありますが、この近さというものがもしかしたら誰かの心ない一言によって、人の気持ちの中で破れを生じさせる場合があるのではないか、御言葉を通して、そのことにふと気がつかされたのです。

ですから、そうした中で、神様と私たちの関係性がイエス様の出来事ゆえに近い、近いといくら語ったところで、聞く者の耳にはなかなか届きません。むしろ、その声は虚しいばかりとなるのでしょう。ましてや、この世の現実を見ていったとき、そこには分断があり、分裂があり、それゆえの誤解や諦めや妥協があるわけです。災害などの過酷な現実に置かれたとき、私たちはこのことをまざまざと知らされることになるのですが、ただ、御言葉が同時に伝えてくれているのが、神様と私たちがイエス様ゆえに近いということなのです。しかし、そのようなとき、この近さがにわかには感じられないわけです。それゆえ、この分かりにくいものを少しでもはっきりさせたい、私たちはそう思い、こうして御言葉に聞こうとしているわけです。ですから、私たちのそうした真面目な気持ちがもし茶化されれば、誰でも気持ちを逆なでされた気分になるのでしょう。ましてや、置かれた現実が厳しければ厳しいほど、「神様と私たちは近い」と、この一言をもってすべて

をくくられることには、何を言っても無駄だとの諦めに近い気持ちにもなるのでしょう。そして、そう思っているのが、もしかしたら能登半島の被災者の皆さんであり、主にあって共に生きる私たちなのではないでしょうか。真面目に一生懸命信仰生活を過ごしながら、「神様、これかよ」と、正直そう思わざるをえないからです。

しかし、そうした中で私たちは、先週に引き続き今週も神の国の奥義を、つまり、天の御国に関わる現実を同じように主にあって共に聞いているのです。そして、御言葉がその私たちに先ず語りかけることは、「イエスは、また、譬えを用いて語られた。『天の国は、ある王が王子のために婚宴を催したのに似ている』」と、私たちの信仰の目的である天の御国についてでありました。それゆえ、ここに記されていることは、私たちの信仰の根幹に関わるものであるのは間違いありません。ただし、そこには先週、今週と、同じ内容のことが繰り返し語られてもいるわけです。このことはつまり、それがいかに難しいものであるかということでもありますが、ですから、イエス様が先ず仰りたいことはこういうことだと思います。それは、「いいか、よーく聞け」ということです。では、よく聞いてみて、そこで私たちは何を思い、また感じるのか、個人的なことを申し上げれば、私自身は頭を抱えて、その場にしゃがみ込みたい気持ちになったということです。それは、最後にイエス様が仰ったことが、「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない」というこの一言であったからです。なぜなら、この一言によって、「到底、私などは」とそう思ってしまったからです。そして、この思いを強くしたのは、イエス様がこの譬え話の中でこんなことを仰っているからでもありました。

「王が客を見ようと入ってくると、婚礼の礼服を着ていない者が一人いた。王は、『友よ、どうして礼服を着ないでここに入ってきたのか』と言った。この者が黙っていると、王は側近の者たちに言った。『この男の手足を縛って、外の暗闇に放り出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう』」と、イエス様は譬え話の中でこんなことを仰っているのですが、ただし、そこで直接問われていることがその身だしなみについてでないことはお分かりのことと思います。「招いていた人々は、ふさわしくなかった」と、御言葉が招きを拒んだ人たちのことをこう振り返っているように、神の子の婚宴にふさわしいか否か、問われていることは主の御前にあるふさわしさであるからです。ちなみに、何かを身につけるということは、イザヤ書 61:10 に「主は救いの衣をわたしに着せ　恵みの晴れ着をまとわせてくださる。花婿のように輝きの冠をかぶらせ　花嫁のように宝石で飾ってくださる。」とあるように、その人の中で何かが大きく変わったということです。従って、私たちの身につけるべきふさわしさとは、自分自身の中で大きく何かが変わるということでもありますが、しかし、それについては、いささか心許ないものでもあるのです。まただから、その点を突っつかれれば、「黙る」しかない。まさに、「友よ」と神様に呼びかけれらながら、黙るしかなかったこの一人の男、それが私自身であるということです。

しかし、その私と、神様はイエス様が共にいますがゆえに近くある、招きに応え、こうして共々に礼拝を献げているこの事実がこの点を明らかにしてくれているわけです。けれども、それにも関わらず、ふさわしさを身につけられず小さく小さくなっている、そして、そのように小さくなるしかないのは私一人だけでなく、もしかしたら、他にも大勢いるのかも知れません。なぜなら、婚宴の場とは、神様が誰彼なく招かれた場所であるからです。しかも、そこには善人も悪人もいて、神様は選り好みせずに、見かけた者すべてを集められたわけです。ですから、そう考えるなら、小さくなるしかないのは、私一人だけではなく、あの人もこの人も、ということにもなるのでしょう。従って、そう考えるなら、イエス様が最後に「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない」と仰っていることはまさに的を射た言葉だと言えます。ならば、どうすれば、ここでイエス様が求めるふさわしさを身につけることができるのか、どうすれば、私たちは大きな顔をしてこの場に留まることができるのか、普通に考えれば、そこで私たちの思うことは善人になるということです。ならば、どうすれば、悪人が善人になれるのか、天の御国に入る上で、それが一番大きな問題ということになるのでしょう。ただ、それについては、私たちがこれまで常に意識し、努力を積み重ねてきたことでもありました。

ならば、イエス様の仰っていることは身も蓋もないものなのでしょうか。そして、それは、私たちの受け止め方によっては、ある意味で正しく、間違ってはいません。

なぜなら、自分でわざわざ招いておきながら、それで小さく小さくなっている者をコテンパンに叩きのめすようなことが言われているからです。それゆえ、私たちはなおのこと変わらなければならない、神様の御前に立つ上でのふさわしさを身につけなければならない、そう強く思うのです。けれども、私たちが別の何かになるために、イエス様はここでこの譬え話を語っておられるのでしょうか。何かになろうなろうとすることを、ここでイエス様は望んでおられるわけではありません。むしろ、それとはまったく別のことを私たちに望んでいるのです。それは、神様の招きを無視して、自分の用事を優先した人々のことを、神様がにべもなく滅ぼし去ったように、私たちが何かに変わることなど、神様は初めから期待してはいないからです。このことはつまり、私たちとは、自分が考えたように何かになろうなろうとしても変わり得ない者だということです。しかし、そうであるからこそまた、私たちは婚宴の席に着きながら、小さく小さくならざるを得ないのです。それは、私たちが自分というものをよく知っているからです。ところが、それがふさわしくないとイエス様はこの譬えをもって私たちに語るのです。しかも、かなり厳しい態度をもって語るのです。それは、私たちに何かに気がつかせたいからでもありますが、しかし、私たちが何かになろうなろうとしてしまうのは、この厳しい態度ゆえのことでもあるのです。けれども、そうであればこそ、そこでよく考えたいのです。それは、神様がイエス様の婚宴の席に私たちを招かれたというのはどういうことかと思うからです。

それは無条件のものであり、何一つその対価が求められてはないということです。つまり、神様が望んでおられることは、私たちに身一つでそこにいることなのです。ところが、私たちは身一つでそこにいることを喜ぶことができずにいる。それは、後ろを振り返っているからです。招かれている喜びよりも、招かれる以前のことに後ろ髪引かれてしまうからです。それは、婚宴の席に招かれながらも、明日のことを心配せざるを得ないのが私たちであるからです。こうして私たちは、あっちとこっちとに足を置き、それゆえ、僅かなことでその足下が大きく揺らぐことになる。まただから、今話題に上っている政治家のように、あの人がこう言った、この人がこんなことをした、と、互いにその責任をなすりつけ合ったりもするのです。そして、挙げ句の果てには、「神様なんて」とそんなことさえ口走ってしまう始末なのです。ですから、その私たちに平安はいつになったら訪れるのだろうか。ましてや、身に危険が及ぶような出来事に見舞われたとき、あるいは、手に負えないような悲惨な出来事に直面したとき、その時、神様が私たちにとっての慰めとなるのかと、そんなことを思ったりもするのです。それゆえ、私たちは思うわけです。「どうせ信じたって」と、あるいは、「信仰にどんな意味があるのか」と、御言葉の語る現実と私たちが生きる現実の裂け目に引きずり込まれて、その深い闇の中でもがき苦しみ、心ならずも、あるいは、心の底から、神様を疑い、呪いの言葉すら吐いてしまうのです。まただからなのでしょう。このイエス様の譬え話にそういう私たちのことを力尽くで変えようとする強さがあると思うのは。そして、この強さゆえにまた、このイエス様の譬え話を身も蓋もない話であると私たちはそう思ってしまうわけです。しかし、このイエス様の譬え話を身も蓋もない話にしてしまっているのは一体誰なのでしょうか。

天の御国を目指し歩む私たちに求められていることとは、この地上において神様の御旨を証しすることです。それがイエス様が最後に仰っている「選ばれた」ということでもあるからです。そして、その恵みとして与えられたものが罪の赦しであり、証しして生きる上で必要な様々な賜物です。そして、その中で最も大きなものが教会という主にあるこの交わりでもありますが、従って、その私たちの上に大きく開かれているものが天の御国の扉だということです。けれども、その一方で、私たちの足下には、得体の知れない破れが見え隠れしているわけです。まただから、この破れを私たちは、何かになることで、あるいは、何かを手にすることで埋め合わせをし、束の間の平安を得ようとするのです。そして、それが神様からの招待状を受け取りながら、それを黙殺した人々でありました。そんなことに構っている余裕はない、そう思ったからです。しかし、もちろん、私たちはそんな彼らとは違います。このことはつまり、イエス様がこの譬え話をもって厳しい態度で臨んでいるのは、その違いをはっきりさせるためであったということです。そして、それは、この外からの厳しさによって現されるものが神様の愛とイエス様の愛でもあるからです。

この神様とイエス様の愛を私たちが強く、また近くに感じるときはどういうときなのでしょうか。それは葬儀の時でもありますが、なぜなら、愛する者と私たちとの間が引き裂かれるそのとき、その破れの奥深くより射し出でる光を、私たちは体全体で感じることになるからです。ただし、この外からの光が射し出でるのは葬儀に限ったことではありません。あらゆる破れ、すべての裂け目からこの光は射し出で、私たちを包み込んでくれているからです。けれども、聖霊の導きによってでしか与えられることのないこの光は、私たちがその手で掴もう掴もうと思ってもなかなか掴めるものではありません。しかし、その手で掴もうとせずとも、私たちの置かれたこの交わりには、この外より光が確かに降り注いでいるのです。この外からの光、外からの力を私たちが実際に経験するのはそのためでもありますが、ですから、破綻しているとしか思えないこのイエス様の譬え話の中で語られていることは、この外よりの力が降り注いでいるということなのです。そして、イエス様はそれをわざわざ回りくどく語っているのですが、それは、それを知るには、私たちが自分で気がつき、体験するしかないからです。従って、この自分で気がつき、体験するしかないものが神様の求められるふさわしさというものでもありますが、けれども、私たちにはそれがすでに与えられているのです。

従って、イエス様が最後に「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない」と仰っていることは多い少ないといった数の上でのことではありません。先の者が後になり、後の者が先になるとイエス様が仰ったように、選ばれた者の上に確かに注がれているもの、それが破れより射し出でる光、外よりの力なのです。それは、私たちはそういう神様との関係性の中に、イエス様が共にいますがゆえにもうすでに置かれているからです。それゆえ、この光は私たちの信仰の生涯を貫くことになり、従って、最後の最後に用意されているだけのものではありません。葬儀という礼拝の場にあって私たちが必ず知らされることになるこの光は、私たちがこうして御言葉に聞き、共に礼拝を献げ、何よりも、主と共にある交わり、主の教会において、私たちの上には常に確かに注がれているものなのです。しかし、この光も、この力も、あくまで外より射し出でるものであって、私たちの手の内にそのすべてがあるわけではありません。私たちが分からなくなるのはそのためです。けれども、イエス様の命に生きる私たちにはイエス様という外よりの力が与えられており、それを内側に抱えながら生きているのが私たちであるのです。ですから、天の御国を目指す上でのふさわしさとは、イエス様という、私たちにとっては本当の意味でよく分からない、このわけの分からないものをその内側に抱えながら生きているという、この確かな感覚を持つことなのだと思います。そして、それが私たちに求められるのは、それが私たちにとっての生きる、生きているということでもあるからです。

分からないことを分かろうとすることも、それを実際に分かるということも、私たちが生きていく上での大事なことです。けれども、分かろうとすることも、分かるということも、それが喜びであるのは、それ以前に分からないというこの気持ちを私たちが大事に大事にしているからです。だから、腐らずに、またいじけずに、分からない、どうしてとの気持ちを大事にできる者を、イエス様は決して一人にはしておかないのです。貧しい者、苦しみの中に置かれている者、その一人ひとりの生涯に天の御国より射し出でるその光で包み、御国へと導いてくださるのはそのためです。身分や権威、また、国籍や学歴といった私たちが生み出したいかなる価値観にも左右されるないのはそのためで、むしろ、そういうものからは最も遠いところに身を置く者を通して明らかにされるもの、それがこの外よりの力であり、光でもあるのです。ただ、そこにいかなる喜び、いかなる面白さがあるか、その全貌がすべて明らかにされているわけではありません。けれども、そこに間違いなくあるのが信仰の喜びであり、面白さでもあるのです。なぜなら、そこに外からの光、力が私たちの上には確かに注がれているからです。

ですから、そういう意味で私たちのすることは、しかめっ面で決まり切ったことを行い、当たり障りのないことを語ることではありません。なんだかよく分からないけど、だけど、楽しいし、うれしい、この体験をみんなで一緒行っていくことなのです。そして、それが外よりの力、外からの光を大事にしてきた、主にある兄弟姉妹、主にある教会に集う私たちであるのです。主にあって、ということはそういうことであり、それゆえ、主にある私たちは御心にかなってふさわしく歩むことができるのです。最後に主にあって共に祈りましょう。